



目 次

○情報雑観 医学部教授 菅野盛夫……………	1	○研 修……………	8
○学内だより 一理学部数学科図書室……………	3	○電算化ニュース……………	9
○システム開発を終わって		○DC 19版理解のために……………	13
學術情報課情報処理掛……………	5	○受贈図書……………	14
○会 議……………	7	○人事往来……………	14

情 報 雑 観

医学部教授 菅野盛夫

「情報化」は、「国際化」や「高齢化」とならんで次世紀の日本社会を特徴づけるキーワードになっているのである。朝起きてから夜寝るまで、多種多様なメディアを通じて、情報が無秩序に提供されている現在の状況では、忙しいとついキーワード部分のみを拾い上げて、その内容を理解した様な気になってしまっている自分に気付くことがある。学术论文の題名でさえ、キャッチフレーズ化している時代であるから、まして不特定多数の人の興味をひかなければならない日常生活情報は、オーバーな表現を使用しながらもその内容を「見出し」に取り入れようと必死に努力しているのがうかがわれて面白い。同一内容の情報が異った源から提供されている場合、これらの「見出し」部分をみるだけで、その内容がわかってしまうことがよくある。これが習い性になってくると、キーワードを拾うだけで、その内容を十分に吟味せず終ることもある。この事は大変恐ろしいことではあるが、日常生活情報であれば許されることかも知れない。しかし、どうしてもよい情報であっても、本当に必要とする時、それを得ようとすると、意外に戸惑うことが少なからずある。恐らく、その最大の理由は、正しいデータベースにアクセスする方法を知らないからであろう。世の中には「歩くデータベース」を呼んでもおかしくない人がいる。例えば、一寸とした会をやらうとしても、私の持っているデータベースからは適当な店を探すことが出来ないが、集まる人数、その構成そして費用を聞いただけで実に適確な店を紹介してくれる人がいる。しかも、実地検証済みだから安心出来る。この様な「歩くデータベース」と豊富なネットワークを持っていると重宝することが多いだろう。いわゆる情報の人脈である。「情報化」社会になると、このような人間臭い情報ネットワークはなくなるのであろうか。「情報化」社会となるためには、データベースが完備され、アクセスする手段

が整備されなければならないので、新しい経済的需要を産み出してくれそうである。つまり、情報が「商品価値」を持ってくる時代となる。

図書館が書物の収集庫であった一時代前には、情報は無償で入手出来るという感覚であった。図書館から雑誌を借り出し、必要とする論文の抜き書きをカードを使って整理していたことを憶い出す。いふなれば、個人レベルでそれなりのデータベースを作りあげていたのである。やがて複写機の時代がやってきた。複写費用を払わなければならないとしても、それはカードやノートに論文の要約を写す時間と労力の代償みたいなものであるから、情報の有償化という感じをもたずに済んだ。しかし、現在の様に情報検索がすすんでくると、費用の負担感が増してくる。膨大な学術情報の中から、適確に自分の研究に必要な情報を仕入れるためには、一次学術情報を加工したデータベースを利用することは、時間と労力の節約から言って当然であるが、それに要する費用も無視出来なくなって来た。これからの時代では、新たに研究プロジェクトを計画する時、設備費や消耗品費の他に「情報費」をランニングコストにあげておかなければならないかも知れない。

ところが、費用を払って得た情報よりも、学会での立話や他教室の研究者と昼食時にかわした会話から得た情報の方が、早くかつ重要であることが少なくない。現在、我々が利用出来るデータベースは一次資料を加工したものが多くのであるが、一次資料、すなわち学術雑誌に公表された論文を我々がみるまでには、その論文が投稿されてから一年近くは経過しているであろうし、実験終了後から計算するならば少くとも一年半以上は経過しているであろう。そうなると、学術雑誌に公表された論文のみに依存して情報を収集しているならば、絶えず先行する研究の後ばかりを追っていなければならない事態ともなるし、時には、先をこされてしまって今までの研究の苦労が水の泡となることもある。現在の機械による情報検索は、今自分のやっている研究の競争相手を明らかにしたり、また相手の研究レベルを知るのには非常に役立つが、一旦それが視野に入ってしまうと、意外と経済効率が悪いものであるという印象を持つ。それに対処するため、しばしば学術集会記録を綿密に調べることはあるが、これとても外国の研究者は、論文を投稿してから学会発表することがあるので、学会発表の段階だからと日本人の感覚でもって安心はしておられない。とはいえ、研究論文にもとづいた情報よりは一步早く相手の動向を知るよすがとなろう。そうなると、せめて先進国の大きな学会で良いから、学術集会に関するデータベースがあればと考えるのは私だけであろうか。

数年前のことであるが、外国雑誌の値上げや為替相場の変動から、医学部図書館の購入外国雑誌タイトル数を減らさなければならなくなったことがある。その時に、機械による情報検索の進歩を想定するならば、研究者の求める狭い範囲の特定情報提供システムと原資料の提供システムの確立によってタイトル数の減少をカバーし得る考え方と、ブラウジングによる広い範囲の、特定化されない情報収集のメリットに立つ考え方と対立したことがある。今考えてみると、意味のない議論であって、両者の考え方は図書館機能の2つの側面を代表するものであり、同一次元で比較議論されるべき性質のものではない。問題提起した私の不明を恥じるのみであるが、両者の考え方に共通するものがある。すなわち「数量」の問題である。ブラウジングをより効果的にするために一定以上の種類の雑誌を収集しなければならないし、より効果的に機械による情報検索をおこなうためには、アクセス出来るデータベースの種類をある程度そろえなければならないことである。

情報伝達機構や処理機構は、技術の進歩によって、より一層便利になっていくであろう。だが、我々がどれだけのデータベースを利用出来るのか、また出来るようになるのかが将来重

要になってこよう。費用効果の観点からみても、情報は有償であることが理解されるようになって来ても、利用価値が高いデータベースにアクセス出来ないのであれば、経費の無駄使いになってしまう恐れがある。

医学部附属病院の再開発が決定し、この3月には外来棟の建設がはじまると聞いている。これを機会に医学部の再開発も具体化して、連動して医学部図書館がより充実したものになる日が遠からず来ることを期待している。北大図書館の将来については、図書館委員会に設置された将来計画小委員会で検討されているが、その将来構想と軌を一にした医学図書館のリモデルが可能になれば大変喜ばしいことである。その時、人がうみ出し、人から人に伝えられ、そして人に利用される情報に、伝達過程に機械がどう介在しようと、人間臭い部分が残ってほしいと思うのである。

学 内 だ よ り

理学部数学科図書室

I

数学教室は現在、7講座22名の教官、学科事務室4名(定員3, 定員外1), 学科図書室4名(定員2, 定員外2)で構成しています。今度、教養部数学教官19名を1講座とする大講座制が決まりましたので、62年度より8講座になります。予算はすべて1本にまとめ、教室主任(教授が毎年交代)を中心に計画をたて、図書室の予算は総予算の60%におよびます。

図書室は図書委員会(教授1名, 各分野の教官5~6名, 図書職員)を中心に運営されています。資料は講座で管理せず、すべて図書室で管理しています。資料数は和書5,500冊, 洋書21,500冊, 製本雑誌215種類15,600冊, 未製本雑誌470種類, プレプリント7,000冊を所蔵しています(昭和60年度現在)。書庫は研究者が自由に資料をみれるよう開架式とし、面積は3号館の4~6階のべ172m², 保存庫として4号館1階に171m²あります(ここは数学教官のみ開架式)。棚数は3号館1,400棚, 4号館1,600棚(手動式書架)で総計3,000棚になります。

II

図書室では支払い以外の図書業務: 目録, 整理, 貸出, 参考, 複写, コンテンツサービス, 紀要交換発送などを行っています。数学の研究者にとって、1800年代の資料も大切ですが、最新の資料もより早く必要とします。迅速に資料を受け入れる努力はもちろん、受け入れ後、単行本の“受け入れ速報”をだすなど、より早い情報の提供に努力しています。

目録は英米目録規則を基本とする独自のとり方で、細かに副出しています。配架方



法も単行本は標目順(主に著者)で、会議録は“開催国→開催年→書名”順と独自のやり方です。これらの方法は他大学から転入された教官の意見や、職員が出張で知った他大学の数学図書室の方法の長所を取入れ、能率よく利用できるように決めたものです。

数学教室では“Hokkaido Mathematical Journal”を発行し、交換で260種の雑誌と100種のプレプリントを受け取っています。(この場合のプレプリントとはレポート類、レクチャーノート類や大学発行の薄いシリーズ物などもふくめた総称)これらの論文はたいいてい雑誌に掲載されますが、時には必要な論文がプレプリントのままということもあります。購入ではなかなか入手できない資料であり、もちろん所蔵目録にも載らないので、所蔵先を捜すのが大変です。そこで、京大数理解析研究所では10大学(旧7帝大が中心)の数学図書室所蔵のプレプリントをデータベース化し“RIMS”という名で公開しています(1967年以降)。プレプリントを発行する大学は年々増えています。

図書室では電算化も検討中で、昨年9月データベースのソフト“dBASE III”を購入、コンピュータに詳しい教官と事務処理のプログラムを作成中です。年々増える資料と限られた人手を考えると、事務処理の軽減化と資料のデータベース化は当面大きな課題です。

III

最後に数学図書室の二次資料を紹介します。

- *Mathematical Reviews (=M. R.) (American Mathematical Society 発行) 1940+
アメリカ数学会に寄せられた世界の数学雑誌、論文集、会議録の論文の論評誌で、分野別に編集されている。著者名累積索引あり。本誌発行より2~3年遅れるが、最も利用度が高い。
- *DIALOG の Mathefile (DIALOG 社作成) 1973+
上記のデータをデータベース化したもので、最も情報が早い。図書室でも昨年より利用している。
- *Current Mathematical Publications (American Mathematical Society 発行) 1969+
逐次刊行される世界の数学雑誌のコンテンツ速報で、分野別に整理されている。二次情報誌として最も情報が早い。本誌発行より数カ月。
- *Zentralblatt fur Mathematik und ihre Grenzgebiete (Springer 発行) 1931+
論文は世界的にカバーされている。M. R. が論評であるのに対し、著者自身の要約が多い。編集は分野別に編集されている。M. R. より情報が早い。著者名累積索引あり。
- *Реферативный Журнал (ВИНИТ 発行) 1953+
ソビエト科学技術研究所の出版で論評はロシア語。主な欧文誌は含んでいるが、ソビエトの雑誌が特に多い。分野別に編集されている。累積索引は不備
- *Jahrbuch uber die Fortschritte der Mathematik (Walter de Gruyter 発行) 1868-1940
ドイツの古い論評誌で、世界の数学論文をカバーしている。M. R. 以前の有力な二次資料。論評はドイツ語でなされたものが多い。
- *Bibliografia Mathematica Italiana 1950-1972
イタリアの雑誌論文の主題別目録
- *Matematika v SSSR 1917-1967
ソビエトの数学者の文献目録
- *Bibliografia Matematica in Romania 1591-1950

ルーマニアの数学者の文献目録

*World Directory of Mathematicians

*Combined Membership List

AMS, MAA, SIAM の会員名簿

*日本数学会会員名簿

(伊藤ますみ)

システム開発をおわって

学術情報課情報処理掛

北大構内は一面真っ白な雪におおわれている。1年前の同じ時期に厳重に梱包された日本電気 ACOS610/10 が搬入され、厳しい寒さの中これからの動きをジッと押さえるかのように静止していた……。オンラインシステムの運用開始から10カ月を経た今日、電算機特有のうなりをあげ、いまや北大図書館オンラインシステムの「情報収集基地」として「情報発信基地」としてフルに稼働している。また100台の端末機は、利用者サービス、図書業務処理になくてはならないものとして完全に定着し、いまでは図書館・室に端末機があるのがめずらしい光景ではなくなった。

1. システム開発の概略

本学図書業務電算化のシステム構築計画は、大きく分けて学内ネットワークシステムの1期計画、全国情報流通システム(学術情報センター)との接続システムの2期計画からなっていた。電算化システムの開発に着手して以来、システム設計、プログラム開発、システム運用と様々のことが交錯しながら進行し、システムの全体はすべて出揃い一応の完成をみた。完成したシステムは、「蔵書検索」、「図書情報管理」、「雑誌情報管理」、「所在情報管理」の4つのサブシステムからなるトータルシステムである。

学情センター目録所在情報システムとの連動を除いた、いわゆるローカルシステムと称される学内ネットワークシステムは、一部4月以降に開発されたプログラムも順次システムに組み込まれ、運用が展開された。また、4月稼働のシステムは運用が開始されたあとも障害の修正・追加および仕様変更を伴う改善が6月まで行われ、7月には完全にシステムの的にも運用的にも安定した状態となった。ただしこの間、一部のプログラムを中止あるいは停止することもなく(運用面に影響を与えることなく)改良が行われたことは、システム設計の基本部分で思い違いのなかったこと、全体としての整合性がとれていたということを示したものと思っよう。北大担当分のプログラムも、上級プログラム講習会メンバーが予定どおり作成した。

できあがったシステムは、夜間開館における貸出・返却処理が端末システム側で行う分散処理方式であることを除けば、すべて電算機本体で処理する集中処理方式で構築されている。集中処理なので、一度本体側で障害等が発生すると全学の図書業務がマヒするという事態になるが、電算機および通信のハード関係、システム運用・維持とソフト関係の両者とも順次改良が行われ、システムが原因で発生する障害は殆どなく、安定した運用状況にある。

通信関係においては、水産学部(函館地区)の応答速度が極端に遅く実用的ではなかった。このため、伝送密度を2,400 bps から9,600 bps に変更したところ、札幌地区と同レベルに達し

大幅な改善をみた。

1 期計画の詳細については、本館報「楡蔭 No. 69」に紹介されているので、ここでは 2 期計画の開発内容を中心に述べることにする。

2. 学術情報センターとの接続システム

2 期計画以前の学情センターとの接続システム (UIP) は、① 英大文字版 (検索のみで登録は不可)、② 英小文字版 (検索/登録できるが操作性と応答速度が非実用的) の 2 種類が存在していた。しかし、北大に設置された端末システム側には、英小文字を入力・表示する機能が無いので、学情センターが持つアルファベットの小文字およびウムラウトやアクサンをついた文字の入力や、いわゆる半角表示に対応できなかった。したがって、両者とも本格的に学情センター目録所在情報システムに参加しているとはいいがたいものであったので、新たな開発を行うこととした。学情センターとの接続システムはケース 1 とケース 2 に大別される。ケース 1 とは、学情センターへのデータ登録と北大システムへの登録を別々の作業として行うシステムで、ケース 2 とは、学情センターへの登録と同時にその画面のデータを北大システムにも取り込む方式のことである。技術的には、ケース 1 のつぎに、ケース 2 があるので、開発計画は 2 段階に分け、ケース 1 は 61 年 9 月、ケース 2 は同年 12 月と設定し進められた。

ケース 1、つまり学情センターとの接続システムの原形の完成は予定した日程よりかなりの遅れとなった。問題となった点は、① 各端末に埋め込むこととした UIP プログラムが処理業務の複雑さのために大きなものとなり、端末のメモリ容量が不足した。② 画面編集・展開と応答速度などの性能面。③ 通信関係 (端末一本体—ゲートウェイプロセッサ—DDX—学情センター間) で、今までの大学図書館の電算化では未知の部分が多かった。④ 同時接続可能端末数を応答速度などを落とさずに 10 台から 30 台へ増加させること。⑤ 文字の入力・表示 (コードの処理と文字化け) などがあり、そのつど足踏み状態が続き、特に①では端末のメモリ増設と、プログラムの大幅な修正が行われた。UIP の作成はローカルシステムと異なり、決められた時間帯でのテスト、データの分析、UIP 側なのか学情センター側の問題なのかの確認、通信関係など複雑な要素が多く、実用化までには長期間を要した。

ケース 2 は予定どおり 12 月に完成した。ケース 2 は、① 書誌構造データ (階層、並列、物理単位) の取り込み方法の変更で、既存の「図書情報管理 (目録システム)」と「蔵書検索」のシステムと図書 DB の大がかりな修正 ② UIP から取り込んだデータを蓄えている中間ファイルから、目録システムへの反映方法 ③ 中間ファイルからはオンライン処理で行うのかバッチ処理で行うのか、またそのタイミングは。以上、ソフトの問題とあわせて、わかり易くかつ効率的なシステム運用を行うにはどのような方法が一番最適か、この点をじっくり検討し設計を行い、さらに、運用が開始された後に実際の経験をもとに検討を行い改良を行った。

ともかく学情センター接続システムの完成は、全国的なネットワークへの本格的な参加を実現し、北大システムの当初の計画を終了することができた。

新たなシステムは、前述の 2 種類に対し特殊文字、記号、音標符号をキーボードに刻印し、直接キーボードからの入力および半角表示ができることから、「図書館仕様端末版」と呼称している。新システムにより、アルファベット系の文字の殆どは表現が可能となった。さらに、キリル文字についてもモードを切り換えるだけで直接入力が可能となった。この機能は全国でも初めてのものであり、従来のコード入力等に比較して画期的なものとなっている。なお、韓国・朝鮮語、中国語、アラビア語等の原綴での表現はできない。新キーボードは刻印文字、ファンクションキー (必要な各種の機能) とともに配列・操作性が良く使い易いものとなっている。

UIP 全体としても操作性、応答速度とも実用的なレベルに達し、学情センターへの登録もスムーズに行うことができるようになった。さらに、登録した書誌・所在データを北大ファイルに取り込み、1日単位での時差更新により北大目録システムを経由してデータベースに蓄積される。したがって、従来は UIP 検索と北大目録システム→図書 DB であったが、現在は UIP→北大目録システム→図書 DB が主体となっている。UIP の処理方式は、前システムが処理プログラムのすべてを本体側にもつ集中処理であったのに対し、「通信処理」を本体側、「画面処理」を端末側で行う分散処理システムである点が異なる。分散処理の長所は接続端末台数が増加しても本体への負荷が大きくなり、性能の一定化が計られた点である。

UIP の本格的な業務は 12 月に本館が開始し、1 月から全学 15 部局に運用が展開され、すでに登録/取り込みは 3,000 件 (1 月末現在) を超え、現在 1 日 150 件のペースで登録が行われている。年度内には 1 万件に達するものと思われる。

3. 今後の課題

現在、データベースに蓄えられ利用に供されているのは、新規受入れの図書のみであるが、
— 今後は電算化システム以前の蔵書 (遡及分) の入力課題となる。

UIP は図書目録については完成したが、雑誌目録の登録/取り込みを残しているため、このシステム化を計る必要がある。ただし、雑誌に関しては図書とは異なり、全国悉皆調査との関係、誌名変遷の処理など学情センター側の問題もあり、北大側だけで対処できない側面もあるので、現在検討中である。

北大システムは軌道にのっているわけであるが、本体側および端末側とも、ソフト維持の問題、システム運用の問題など、何年か先を見越したシステム環境整備をしておく必要がある。また、札幌近隣地区大学とのネットワークなど今後取り組まなければならない課題もある。その他、新たに発生してくる問題もあろう。

昨年春、雪どけとともに芽生えた「北大図書館オンラインシステム」は、約 1 年を経たいま着実に実を結ぼうとしている。今後さらに発展していくために、関係各位のご支援とご協力をお願いする次第である。
(文責 杉田福夫)

◆ 会 議

第 130 回 図 書 館 委 員 会

<と き 昭和 61 年 12 月 3 日 (水)>

<と ころ 附 属 図 書 館 会 議 室>

議 題

1. 概算要求にかかる遡及入力の考え方について
2. 北海道教育大学附属図書館 (ML 館) の電算機接続希望について
3. そ の 他

第 90 回 教 養 分 館 委 員 会

<と き 昭和 62 年 1 月 12 日 (月)>

<と ころ 教 養 分 館 会 議 室>

議 題

1. 昭和 62 年度教官指定図書の選定について
2. 附属図書館将来計画小委員会の中間報告 (案) について
3. 分館 LL 機器の一部を本館に移設する案について
4. そ の 他

図書担当掛長会議

<と き 昭和61年10月31日(金)>

<と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 部局所蔵図書等の相互利用について
2. そ の 他

図書担当掛長会議

<と き 昭和61年12月16日(火)>

<と ころ 附属図書館会議室>

議 題

1. 図書館間の相互貸借について
2. そ の 他

◆ 研 修

昭和61年度北海道大学図書目録担当職員講習会

標記講習会は、昭和61年10月27日から29日までの3日間にわたって本学附属図書館で行われた。

この講習会は、本学の図書目録担当職員に対して、学術情報センターの目録所在情報サービスの利用に際し、これを円滑に行うために必要な基本的知識の修得と北海道大学図書館オンラインシステムに関する使用法等に習熟させることを目的に実施されたものである。

なお、今回は、第2回目で受講者は、20名が参加して行われ、修了者全員に修了証書が授与された。

講習日程は次のとおりである。

	時 間	講 習 内 容		
第 1 日	9:30-9:40	講習会開会挨拶	事務部長	
	9:40-11:00	学情センター目録システム システムの基本的な考え方	学情課長	
	11:00-12:00	図書と雑誌	和と洋	参照ファイルと NC ファイル 図書書誌ファイル
		システム操作説明		情報処理掛
		図書所蔵入力	例①	
13:00-14:00	著者名典拠ファイル	例②		
	統一書名典拠	例③		
	書誌構造	例④ 例⑤		
14:00-17:00	操作実習 検索技法 例① 例② 例③ 例④ 例⑤		情報処理掛	
第 2 日	8:30-9:30	カナタイプ自習	個別質問	
	9:30-12:00	実習	例① 例②	
	13:00-17:00	実習	例④	
第 3 日	8:30-9:30	カナタイプ自習	個別質問	
	9:30-12:00	実習	例⑤	
	13:00-16:30	質問	オリジナル入力実例	各 講 師
	16:30-17:00	終了式		

昭和 61 年度北海道大学図書館職員講習会

毎年秋期に実施している標記講習会は、11月18、19の両日、本学附属図書館を会場に行われた。

これは、本学等の図書館職員に対して、図書館業務の機械化に関する基礎的知識を付与し、あわせて「学術情報センターシステム」に対応した本学内および地区ネットワーク形成に資することを目的としたもので、参加者は、本学図書職員56名、北海道教育大学10名、小樽商科大学、旭川工業高等専門学校各2名、室蘭工業大学、旭川医科大学各1名、合計72名であった。

なお、講習会日程は、次のとおりである。

昭和 61 年度北海道大学図書館職員講習会日程

昭和 61 年 11 月 18 日～11 月 19 日
北海道大学附属図書館会議室

<第1日目>		11月18日(火)	
13:00～13:30	受付		
13:30～	開会挨拶	北海道大学附属図書館長	大野 公 男
	講師紹介	〃 事務部長	酒 井 豊
13:40～15:10	講 義	「東京工業大学附属図書館の電算機システムについて」 東京工業大学附属図書館 図書館専門員 内 藤 英 雄	
15:10～15:20	質疑応答		
15:30～17:00	講 義	「UIP について」 学術情報センター企画係長 石 井 啓 豊	
<第2日目>		11月19日(水)	
9:30～10:00	受付		
10:00～	講師紹介	北海道大学附属図書館 事務部長	酒 井 豊
10:05～12:00	特別講演	「NCR について」 国立国会図書館参考書誌部 司書監 丸 山 昭 二 郎	
12:00	閉会挨拶	北海道大学附属図書館 事務部長	酒 井 豊

◆ 電算化ニュース

システム設計実施部会委員が交代

「システム設計および稼働に至るまでの諸準備に当たる」ことを目的に、60年5月に発足した「システム設計実施部会」は、当初の目的が終了してシステムが順調に稼働を始めたため、いままでの委員は61年10月より下記の委員と交代しました。

今後は、プログラム管理等運用上の問題の検討が主な目的となるため、新委員は上級プログラム講習受講者を中心に構成されました。

新システム設計実施部会委員

◎附属図書館学術情報課長	山田 常雄	文学部図書掛	山田 達雄
○ " " 図書館専門員	達 昭二	"	菅原 英一
" 目録掛	畠山 輝敏	経済学部図書掛	岡田 潔
" 閲覧掛	吉竹 忍	医学部図書整理掛	東 重俊
" 参考調査掛	小西 和信	事務局(担当掛)	
" 学術情報掛長	高砂 慶	附属図書館情報処理掛長	宇野 弘純
" 学術情報掛	富田 健市	" 情報処理掛	杉田 福夫
教養分館整理掛	加徳 健三		
" 閲覧掛長	輪木 安雄	◎ 責任者	○ 補佐役

運用部会報告

図書情報システム運用部会

第8回 昭和61年11月28日(金)

1. 書誌・所在情報に関するDB削除について(結果報告)
2. 目録システムの進捗状況と今後の移行計画等について
3. その他
 - (1) ユーザインターフェースプログラム(UIP)の使用について
 - (2) テキストメールについて
 - (3) キリル文字の入力について

雑誌情報システム運用部会

第8回 昭和61年10月7日(火)

1. 雑誌所蔵データベース自動編集について
2. 次年度受入雑誌ファイルの準備について
3. 巻・号・通号の扱いについて
4. 冊子体目録の作成について

第9回 昭和62年1月21日(水)

1. 雑誌所蔵データの整備と冊子体目録の作成について
2. 寄贈雑誌の分担収集について
3. 操作手引書の整備について
4. 業務連絡

所在情報システム運用部会

第5回 昭和61年9月26日(金)

1. プログラムの仕様変更について
2. 図書館利用証の取扱いについて
 - イ. 名称変更
 - ロ. 紛失等の処理
 - ハ. 人事異動時等の処理
3. その他

第6回 昭和61年12月15日(月)

1. 研究室貸出図書リストについて
2. その他

電 算 化 記 録 (3)

昭和61年10月~62年1月

年月日	事 項	年月日	事 項
62.10.1	「書誌情報品質管理作業班(目録掛と、各部局目録担当者)」による、入力データ確認、点検作業。当分の間月2回、システム研修室	61.12.4	第4回新システム設計実施部会
16.10.7	第8回雑誌情報システム運用部会	61.12.5	ケース2での入力7割位可能となり、学情課と目録掛によりテスト入力開始
61.10.9	新委員による第1回システム設計実施部会	〃	UIP接続が本体処理から端末処理になったため、学情セと応答速度のテスト実施
61.10.13	「LAN」説明会、講師 応電研 三木助教	61.12.8	学情セと応答速度のテスト2回目実施
61.10.17	日本電気との定例打ち合わせ会議(第22回)	61.12.10~11	目録掛員、実施部会委員、目録講習会講師を対象にケース2による学情セへの入力実習
61.10.23	第2回新システム設計実施部会	61.12.15	第6回所在情報システム運用部会
61.10.24	2期計画作業の遅れについて、日本電気と学情課で打ち合せ	61.12.16~18	部局目録担当者に、学情セへのケース2による入力実習(第1回,8名)
61.10.27~29	昭和61年度北海道大学目録担当職員講習会。学内担当者13名、道地区5大学より7名の計20名受講	61.12.18	第5回新システム設計実施部会
61.10.30	学情セに「目録端末」キーボードの現物見本提示	61.12.22~24	部局目録担当者に、学情セへのケース2による入力実習(第2回,10名)
61.11.10	第13回地域ネットワーク専門委員会	61.12.23	北大目録システム取り込みテスト
61.11.10~11	システム研修室を使用して、北教大図書館員十数名電算化研修	61.12.24	北大目録システム(ケース2による取り込み)完成
61.11.13	第3回新システム設計実施部会	61.12.25	第6回新システム設計実施部会
61.11.14	12月に向け全端末のメモリー増設作業(NEFS)	〃	第14回地域ネットワーク委員会
61.11.18~19	昭和61年北海道大学図書館職員講習会	61.12.26	UIPの端末処理プログラム、学情セ入力部局分の移植完了。新年早々、各部局からの学情セへの入力可能に
61.11.20~21	電算機室を中心に、北教大図書館職員2回目の電算化研修	〃	本館、文系一部部局のキーボードを「目録端末キーボード」に取り替え
61.11.21	日本電気との定例打ち合わせ会議(第23回)	62.1.7~8	NEFSにより学内全端末の定期保守点検と、キーボードを「目録端末キーボード」に取り替え
61.11.26	強風雪のため瞬間停電が頻発、16時まで端末の使用中止	62.1.8	第7回新システム設計実施部会
61.11.28	第8回図書情報システム運用部会	62.1.12	19日より実施の、ケース2入力OJT(ON THE JOB TRAINING)の説明会
〃	ポータブルターミナル(移動用端末)についてのプログラム、日本電気よりリリース	62.1.19~2.27	ケース2入力のOJT開始。20名が3班に分かれ1班8日間で実施
61.12.2	水産学部のDDX,2,400bpsを9,600bpsに切り替え	62.1.21	第9回雑誌情報システム運用部会
61.12.3	第130回図書館委員会。「概算要求にかかる廻及入力方法について」、「北教大図(ML)の電算機接続要求について」	62.1.22	第8回新システム設計実施部会
		62.1.23	学情セの橋爪、大山教官来館。学情目録システムとの接続状況を調査
		62.1.24	NEFSによりCPUの定期保守点検実施
		62.1.27	日本電気との定例打ち合わせ会議(第24回)

データベース登録件数

(昭和62年1月31日現在)

	図書(入力冊数)			雑誌(純タイトル数)			雑誌 延 ト 合 計	備 考
	和	洋	計	和	洋	計		
附属図書館	5,756	4,316	10,072	1,244	1,002	2,246	2,408	分館, 法学部, 教養部, 言語文化部, 大計センターを含む
文学部	1,340	1,688	3,028	115	462	577	588	
教育学部	1,551	252	1,803	258	105	453	485	
経済学部	1,131	597	1,728	374	289	663	667	
理学部	442	972	1,414	116	749	865	1,113	情報処理セ, 実験生物セ, 遺伝子セを含む
医学部	489	494	983	344	728	1,072	1,364	附属病院を含む
歯学部	146	105	251	197	247	444	517	〃
薬学部	174	47	221	71	114	185	204	
工学部	964	719	1,683	327	838	1,165	1,689	
農学部	963	383	1,346	286	760	1,046	1,386	演習林, 農場を含む
獣医学部	78	92	170	136	231	367	393	
水産学部	617	104	721	176	401	577	736	
低温研	212	38	250	277	256	533	537	
応電研	4	1	5	44	129	173	180	
触媒研	19	191	210	13	56	69	69	
免疫研				10	53	63	65	図書は図書館で入力
スラブ研	11	329	340	26	176	202	202	
環境科学研究科	65	9	74	155	143	298	298	
医療技術短大	603	61	664	183	48	231	232	
計	14,565	10,398	24,963	3,229	5,330	8,559	13,133	

「北海道大学図書館オンラインシステム」を作成、配布

本学の図書業務電算化は、予定どおり61年4月より全学一斉に稼働し、12月末からはケース2による学術情報センターへのデータ入力も可能となりました。

当初の計画も、細部を残してほぼ終了しましたので、この機会に、本学システムの全容を紹介した「北海道大学図書館オンラインシステム」(A4版, 226頁)を作成しました。内容は、電算化にいたるまでの経緯、機器の構成、各サブシステムの紹介、電算化切り替えに伴う教育・研修、システムの管理・運用、道地区他大学図書館との関係等が詳述され、付録として各種のデータ・記録等を収録したものです。

本書は、学内の各部署長、事務長、図書室等に配布されておりますので、ご覧になりたい方は、所属部署の図書室にお申し出ください。なお、道内の各大学図書館をはじめ、全国の国立大学図書館、関係機関等にも送付しました。

DC 19 版 勉 強 会 へ の お 誘 い

I. <論理学上図書の分類は不整合である>とはイギリスの経済学者 W. S. Jevons の言葉だそうですが、この言葉のもつ意味の検証はともかくとして、現在、特に北大においては、<分類というもの>を再考すべき時期に来ているのではないのでしょうか。どの様なかたちで再考するにしても、始めなければ内容を持つことはできません。ということで DC 19 版の勉強会を今年の 10 月から始めています。

分類の仕事は大変な割りには、つまり整理の過程で多くの時間と労苦を伴うにもかかわらず、あるべき妥当な位置をもっていない、あるいは、分類は難しいものだ、という神話のみがひとり歩きしてその実体が的確に把握されていない、という現状は何らかのアクションがなければ変わるものではないと思われまふ。そして、分類作業の難しさの反動として極めて安易な解決法が至る所に流布されていたり、そうでなければ、分類表の特定の領域についてのパラノイア的な理解やその表現に良心の所在を見出す、といった本質的ではない状態から脱出するためにも、私たちがこれから使おうとしている（あるいは、既に使っている）分類表に対する明瞭で全体を通底し得る認識は不可欠なはずなのです。（菅原）

II. 人は十人十色といいます。視点を変えて紹介を続けます。NC の画面に DC 16 の表示はありません。もちろん分類はオプション・データですから入力自由です。また NC は分類について配架分類ではなく、書誌分類を求めています。これらの事実は将来の分類のありかたを示すものと思われまふ。時期は未定ですが、北大は DC 19 版に切り換えることが決まっております、すでに使用している部局もあります。このような状況において DC 分類の体系的理解、19 版の形式的展開の理解、論理的展開の理解が急がれております。

使用しております Batty の入門書は構成がユニークでとても楽しいものです。しかしフレームを追うごとに難しさがひろがります。それは 168 のフレームからなり、各フレームに説明と問題があり、<正しい>と思うものを選びそのフレームにゆきまふと、Correct, No. 等の言葉に先ず出会います。その後になぜ正しいのか、どのように誤りなのかの説明されています。このように段階を追って理解に至るような構成になっています。

メンバーを御覧になるとわかると思ひまふが、日本における分類の泰斗から、私のような存在まで幅の広い構成です。実力のアンバランスが不思議なバランスを保っています。これは同じ仕事をするなら、確信をもった仕事がしたいという思いがあるからなのでしょう。忙がしく、変化の多い時にこそ新しい芽が生れ育つのかも知れまふ。 (午来)

III. 詳細は以下の通りですが、現在 (1 月末)、テキストの訳出はほとんど終わり、訳文の検討に入っています。DC 19 版本表との確認作業を行う予定です。また Tables は 1-7 より成っていますが、Table 2: Areas の展開が非常に詳細に複雑になっています。

DC 19 版理解のために参加してみまふせんか。

1. 日時・場所： 隔週の火曜日, 17:30-19:00 教育学部小会議室
2. テキスト： Batty, C. D., An introduction to the Dewey decimal classification (DC 19 版は必携)
3. 参加者： 秋月 (スラ研), 大垣 (図), 加徳 (分), 午来 (教育), 菅原 (文), 山田 (図)
4. 連絡先： 午来 (教育), 菅原 (文)

◆ 受 贈 図 書

本学教官著作物

〔本 館〕

○名 誉 教 授

伊 藤 俊 夫 (編) 北海道経済を考え直す～活性化をめざして～ 共同文化社 1986

○文 学 部

松 川 健 二 (編) 歌文集 楡のした道 神山南星著 南九州新聞社 1986

金 子 勇 (共編著) クオリティ・オブ・ライフ～現代社会を知る～ 福村出版 1986

○理 学 部

田 中 一 (共著) 物理学とは何か 培風館 1986

○言語文化部

中 野 美代子 三蔵法師～三千世界を跋涉す～ (中国の英傑 6) 集英社 1986

〃 南半球綺想曲 響文社 1986

中 村 健之介 (訳) 明治日本とニコライ大主教 (もんじゅ選書 25) ポズニエーエフ著 講談社 1986

○低温科学研究所

若 浜 五 郎 (共著) 都市の変容と自然災害 石原安雄等編 日本学術振興会 1986

〔教 養 分 館〕

○言語文化部

中 野 美代子 三蔵法師～三千世界を跋涉す～ (中国の英傑 6) 集英社 1986

〃 南半球綺想曲 響文社 1986

◇ 人 事 往 来 ◇

○図書館委員会

三 木 信 弘 応用電気研究所助教授 61.11.1

北海道大学附属図書館報 「楡蔭」 (通巻 71 号)

1987年2月28日 発行 発行人 酒 井 豊

編集委員 遠 昭二(長)・久原秀志(図)・山口國雄(図)・高砂 慶(図)・藤島 隆(医)・岡田 潔(経)
宇野洋子(理)

発 行 所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北 8 条西 5 丁目 電話代表 716-2111 (2967)

印 刷 所 文 栄 堂 印 刷 所 札幌市中央区北 3 条東 7 丁目 電話代表 231-5560 ・ 5561